

# 真鍋さん 地球に捧げた情熱

## 地元・愛媛や東大関係者喜び

### ノーベル物理学賞

地球温暖化のメカニズムに迫り、予測分野を切り開いてきた気象学者の真鍋淑郎さん(90)が5日、ノーベル物理学賞を受賞することが決まった。真鍋さんは「非常にうれしい。感無量だ」と語った。同賞には縁遠いとされる気象分野での受賞に、ゆかりの人々は喜びや驚きの声を上げた。

▼1面参照

「本心に夢みたい」  
真鍋さんが子ども時代を過ごした愛媛県の新立村(現・四国中央市新宮町)で、尋常高等小学校の同級生だった大岡武重さん(89)はこう喜んだ。

「親戚も優秀だったが、遊びに行っても(真鍋さん)はいつも勉強してる」

「(真鍋さん)はいつも勉強してる」と、ぼやいていた」と言

## 「最もスパコン使う男」頭脳流出話題に

「日本は台風が来ないと雨が少ない」と言っていたのを覚えている」。

「(真鍋さん)は後進の指導のために帰国していた時期だ。とにかく研究が好きでたまらない人だった。みんなのアイドルで、学生や同僚の研究者から人気があった」という。

真鍋さんは1992年、地球環境問題の解決に貢献した研究者らに贈られる旭硝子財団の「ブループラネット賞」の初代受賞者。浅井さんはその選考委員で、賞関連の出版物に「環境科学の分野のノーベル賞」と

「(真鍋さん)は後進の指導のために帰国していた時期だ。とにかく研究が好きでたまらない人だった。みんなのアイドルで、学生や同僚の研究者から人気があった」という。

「(真鍋さん)は後進の指導のために帰国していた時期だ。とにかく研究が好きでたまらない人だった。みんなのアイドルで、学生や同僚の研究者から人気があった」という。

真鍋氏の受賞が決定したことを受け、岸田文雄首相は5日、「日本における研究活動の積み重ねをもとに、海外で活躍されている研究者の独創的な発想による真実の発見が、人類社会の持続的な発展や国際社会に大きく貢献し、世界から認められたことを、日本国民として誇りに思います」とのコメントを出した。

真鍋さんと大学院生の頃から研究をともにした東大名誉教授の浅井富雄さん(89)は「地球環境問題を考える上で非常に意味のあること」と喜ぶ。人柄について「さっくばらんな性格で、良い意味で学者らしくかぬ人」と評した。

が本拠地であり、そこに戻る」と家族への思いを語っていた」と振り返る。



真鍋淑郎さんと、ノーベル平和賞を受けた故ワンガリ・マタイさん(左)。地球環境保全に大きな貢献をしたとして、「KYOTO地球環境の殿堂」で表彰された=2010年2月

1931年に愛媛県で生まれた真鍋さんは祖父や父のように医師になるつもりだったが、「緊急時に頭が血が上る性格で、向かない」と思い直し、地球物理学の道に進んだという。

東大大学院を修了後、活躍の場を求め58年に渡米。米気象局などで気候変動のメカニズムを解明する研究に取り組んだ。自身が開発した、気候を予測する仕組みについて、後年のインタビューで「天気予報と考え方は同じ」と語った。天気予報では世界を何十万個ものマス目で区切り、それぞれに気温や気圧などの数値を与え、変化を計算していく。「同じようなことを海や陸でもやって予測する」と解説した。

96年に朝日賞を受賞。当時、「世界で最もよくスパコンビュターを使う男」と呼ばれたが、「自然は無限に複雑。複雑さを競ったらスパコンビュターでも勝てない。それをいかに単純化するか、本質をどうつかまえるか。生け花のようなバランスが大事だ」と語っていた。

翌97年、約40年間過ごした米国から研究拠点を日本に移す際、現地では「頭脳流出」と話題になった。

当時、真鍋さんと一緒に研究に取り組んだ東京大学の阿部彰子教授(気候学)は「コンピュターの計算能力には限界があり、何かを選び、何かを省略しなければならぬ。そういう時に粘り強くことごとく考え抜いていた」と話す。

2001年、日本で率いた研究プロジェクトを「楽しい4年間でした」と振り返り、再び米国へ戻った。阿部さんは「日本を離れる時は『子どもが暮らす米国